

シューベルト(マーラー編):弦楽四重奏曲 第 14 番《死と乙女》(弦楽合奏版)

今回演奏される弦楽合奏版は、マーラーの編曲による。もとの弦楽四重奏曲第 14 番《死と乙女》(D810)は、シューベルトが 27 歳の 1824 年に作曲したもので、第 2 楽章の変奏曲主題に、彼が 20 歳の頃に書いた同名歌曲(D531)のピアノ伴奏旋律が用いられていることから、この題名が付けられた。歌詞はドイツの詩人マティアス・クラウディウスによる 8 行ほどの短い詩で、死に瀕した若い女性と死神との対話のかたちをとっている。死が恐怖ではなく“永遠の安らぎをもたらすもの”と捉えられているところが、いかにもロマン派らしい。この弦楽四重奏曲を作曲した頃、シューベルトは病魔を自覚し始めていたらしく、それが本作にも反映されているのだろうか、4 つの楽章すべてが短調という異例の構成になっている。マーラーは 1894 年、音楽監督を務めていたハンブルク市立劇場で演奏するために、この作品を 5 部の弦楽合奏用(コントラバスを付加)に編曲し、少なくとも第 2 楽章を同年 11 月の公演で披露したことがわかっている。

シューベルト:弦楽五重奏曲(弦楽合奏版)

1828 年夏に作曲されたシューベルト唯一の弦楽五重奏曲で、同年 11 月の作曲者の死により最後の室内楽曲となった。ヴァイオリン 2、ヴィオラ 1、チェロ 2 というモーツァルトの弦楽五重奏曲とは異なる編成を採用し、低音域の充実が図られている。シューベルトならではの謹直な音楽性とロマンティックな気分が交錯する本曲は、瑞々しい感性に満ち、作品に対する並々ならぬ意欲が感じられる。長大な第 1 楽章アレグロ・マ・ノン・トロppoはソナタ形式。美しい抒情性を帯びた主題と、緊張を高める鋭い主題とがドラマティックな和声とともに進行する。三部形式による第 2 楽章アダージョは、ホ長調の息の長い旋律が繰り返されたのち、中間部で突如、へ短調の慟哭するような旋律が現れて転調するが、再び平穏を取り戻す。第 3 楽章スケルツォは、力強くバイタリティあふれるプレストの主部と、アンダンテ・ソステヌートの緩やかで内省的なトリオとの対比が印象的。第 4 楽章アレグレットは、自由なロンド・ソナタ形式による華やかなフィナーレ。舞曲的な性格を強く感じさせる 2 つの主題が交互に現れ、コーダでは次第にテンポを増し、エネルギーに曲を閉じる。